



邸宅

近代和風建築の集積「邸宅」

財を成した小樽の経営者は、金に糸目を付けず豪邸を建築した。敷地も坂の街・小樽らしく、現在の東雲町、富岡といった眺望の良い場所を選んだ。邸宅は、主屋を和風とするのが一般的で、これに洋風の応接間や、木骨石造など防火に配慮した蔵を併設する場合がある。

主屋の和室は続き間に広縁を廻らせ、海と庭園を望む眺望が重視される。床、棚、付書院を設けた書院風の構えを持ちつつも、欄間の造作など自由な数寄屋風の意匠が積極的に行われている。木材は全国から集められ、希少な材、長大な材が随所に用いられる。大工棟梁などの職人も、本州から呼び寄せられている。

洋風の応接間は、下見板張りの外壁がペンキで塗られ、持送りなどの細部も表現されている。内部は壁と天井が漆喰で塗り固められ、天井の中心飾りや壁に沿った廻り縁も、左官により精巧に仕上げられる。上げ下げ窓など洋風の要素が、和風の主屋にも取り入れられているのは、小樽のみならず北海道の近代和風建築の特徴である。更に、照明など近代的な設備を取り込んでいる。

以上は一般的な話で、必ずしも全ての内容が各々の邸宅に当てはまらない。また現在の住宅と比べると、邸宅と呼べるような規模ではないかもしれない。しかし、歴史を知っていると小樽の邸宅巡りが楽しくなるに違いない。

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第4号

遠藤又兵衛邸



所在地／小樽市富岡1丁目9-4

建築年／明治39年（1906）

構 造／木造平家

山形県出身の海産物商・遠藤又兵衛の邸宅として建てられた。正面に簷子と白漆喰の壁、海側に背の高い煉瓦塀門を廻し、ともに屋根に瓦を葺いている。正面左手の門をくぐると、右手は主玄関、左手が脇玄関で、ともにむくり（弓形に膨らんだ曲がり）の付いた入母屋である。主屋は棧瓦葺の入母屋屋根で一見純和風建築であるが、玄関横には白ペンキ塗り、六角形状のベイウインドウ付きの洋間（応接室）を配置する。洋間は、漆喰による中心飾りと廻縁の蛇腹、大理石によるマントルピースなど、明治期の洋風意匠が随所に用いられている。当初は敷地南側に現存する棟に加え、西側と北側にも建物があり、中央の庭園を囲むようにコの字型に3棟が配されていた（昭和58年に解体）。

所有者は大正2年（1913）に山本厚三（小樽商業会議所会頭、任1917～1921）が譲り受け、北海道炭鉱汽船を経て、昭和39年（1964）より立正佼成会へ移り現在に至る。

現在／立正佼成会小樽教会

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 67 号 塩田別邸



所在地／小樽市入船 2 丁目 8-1

建築年／大正元年（1912）頃

構造／母屋：木造平家一部 2 階建 蔵：木骨石造 2 階建

明治 22（1889）年創業の塩田回漕店を営んだ、塩田安蔵の別邸。初代安蔵は明治 20 年代に堺町と南浜町（現色内）で店を構え、二代安蔵は昭和初期に小樽～樺太間で豪華な貨客船を就航させた。昭和 27 年（1952）には風下邸となり、昭和 30 年代には質屋を営む傍らで貸間にも使われていた。

創建年は定かではないが、蔵の鍵につく札の記載から、大正元年頃の建築と推察される。和風の主屋はむくりのある切妻屋根で、玄関部分は鬼板の付いた入母屋屋根にむくりのある切妻屋根を組み合わせている。かつては向かって玄関左側に応接間（洋間）と茶室、右側の縁側奥には大広間があったものの、雪害と老朽化のため、主屋と木骨石造の蔵を残し取り壊された。平成 3 年（1991）に天井板やタイルを用いた数寄屋風の便所など、当初から遺る魅力的な部分を生かした改修が行われ、飲食店舗として活用されている。

現在／夢二亭

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 71 号

板谷邸



所在地／小樽市東雲町 1-19
建築年／大正 15 年（1926）～昭和 2 年（1927）
構 造／母屋：木造平家 蔵：石造 2 階建

初代・板谷宮吉（1857～1918）は、越後生まれの明治 8 年（1875）小樽へ渡り海運業で財をなした。この邸宅は 2 代目・板谷宮吉（1885～1962）のものである。海運業に加え永山、美瑛、雨竜にも大農場を経営する傍ら、政治家としても活躍し、昭和 2 年（1927）に多額納税貴族院議員、同 8 年には無給で小樽市名誉市長を務めた。篤志家としても知られ、小樽市中学校へ土地と 25 万円を、母校の早稲田大学に 10 万円を寄附している。

和館の主屋は、東を正面にした棟とそれに直行する南側の棟で構成され、いずれも平家、寄棟屋根の銅板葺きである。東の棟は、入母屋の玄関の左手を 2 室の十畳間（続き間）とし、鉤の手状に縁を廻らせている。平家の洋館は和館の北に併設され、外壁は木造モルタル塗り、銅板葺きのマンサード屋根を載せる。和室の背面には、北に木骨石造 2 階建の蔵、南に煉瓦造の防空壕を設ける。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 74 号 坂牛邸



所在地／小樽市入船 5 丁目 8-15
建築年／昭和 2 年（1927）
構造／木造 2 階建

坂牛直太郎の住宅兼弁護士事務所であり、建築家・田上義也（1899～1991）の 1920 年代を代表する作品の一つである。全体に、田上の師匠であり、東京・帝国ホテル（大正 12 年）を設計した建築家フランク・ロイド・ライトの影響が見られる。水平性の強い外観と内部空間、十字型平面がそれである。一方で 2 階北面の柱型には、1930 年代にライトの影響から脱し自分の作風を確立した「雪国的造形」の意図が確認できる。翌年南側に上田邸が建てられ、同じ敷地内に田上の設計による住宅が 2 棟並んでいた（上田邸は平成 21 年解体）。田上は坂牛邸と上田邸の他にも、旧高田邸（大正 14 年）、坂邸（昭和 2 年）、瀬川邸（昭和 5 年）を手がけており、小樽との関係の深さが伺える。

札幌で現在喫茶店として活用されている旧小熊邸（昭和 3 年）とともに、田上が設計した建築で、内部を見学できる数少ない住宅の一つである。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）
photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 26 号

猪股邸



所在地／小樽市住吉町 4-9
建築年／明治 39 年（1906）
構造／木造 2 階建

猪股家の 2 代・猪股孫八は、以前色内 1 丁目に邸宅を構えていたが、明治 37 年（1904）の大火で焼失した。そのため、入船の七差路から南へ上った高台である現在地に邸宅を新築した。

まず目を引くのが、防火のために備えられた石造りの門と塀、そして蔵である。石は天狗山から切り出された。門の意匠は、当主の中国旅行のスケッチが元になったという。邸宅は全体に純和風造りであるが、玄関左脇に洋風の応接室が設けられている。新潟県から大工を呼び、インテリア関係の設計は東京の白木屋デパートに依頼した。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 27 号 寿原邸



所在地／小樽市東雲町 8-1
建築年／大正元年（1912）
構造／木造 2 階建

本住宅は、小樽のみならず広く政界と財界で活躍した、高橋直治と寿原外吉の住まいであった。敷地は水天宮境内の北に隣接し、傾斜のため 3 棟が廊下で結ばれている。入母屋の玄関がある一番低い場所は主屋で、木骨石造 2 階建の蔵を併設している。中央の棟は洋間の応接室を置き、一番高い場所は接客用に和室の続き間の棟としている。

現在／旧寿原邸

text 原 朋教（建築史家、工学博士）
photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 55 号

島谷汽船(株)社長宅



所在地／小樽市富岡 2 丁目 25-32
建築年／昭和 2 年（1927）
構造／木造 2 階建

明治から大正期にかけて、その眺望の良さから多くの邸宅が富岡地区に建てられた。ここからは、小樽の市街地を近景、小樽港と石狩湾を中景、浜益の山並みを遠景として見ることができる。大邸宅が建ち始めた明治 30 年代の邸宅は、例えば遠藤又兵衛邸など、広大な敷地の中で和風の主屋に洋館または洋間を付属していた。対してこの邸宅は、昭和初期の和風邸宅の趣を伝えていて、主屋と玄関には瓦葺の入母屋屋根、外壁には押縁下見板に漆喰が用いられている。

現在／三箇邸

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 57 号

日本郵船(株)支店長社宅



所在地／小樽市末広町 3-7

建築年／明治末期

構造／木造平家

支店長社宅はかつて同じ敷地内に、社員社宅（1棟2戸建）、独身寮、浴場などが共に建てられ、擁壁で囲まれ門が設けられていた。北海道の近代和風建築では積極的に洋風要素が取り込まれているが、この支店長社宅でも瓦葺の屋根に、下見板張り外壁と上げ下げ窓の洋間が配置されている。鬼瓦に刻まれているのは日本郵船の社章である。

現在／下村邸

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.